

医療 史跡

結核で逝った文学者

“結核”に関する医療史跡を調べると、2人の文学者の足跡が印象に残った。

●樋口一葉

樋口一葉（1872～1896年）は、明治27（1894）年12月に、雑誌「文學界」に「大つごもり」を発表してから、「たけくらべ」が完結される明治29（1896）年1月までに、代表作を書き上げている。この14か月の期間は「奇蹟の十四ヶ月」といわれ、今年、一葉生誕140年でもある。

22歳で「大つごもり」を発表しているが、この頃から肺結核の症状が出始めている。肺結核の症状は、咳、痰、血痰、胸痛、発熱などで、血痰や咯血を除けばそれほど深刻なものではない。咳、痰が出るたびに、“血が混じっていないから大丈夫”と結核を否定する毎日であった。文壇での成功を目指して頑張り始めた一葉にとっては、咳、痰、微熱などを気に病む余裕はない。それより生活苦を克服するために原稿料を手に入れることが重要な毎日であった。明治29（1896）年7月からの発熱は、飲み込んだ結核菌で腸結核を起こしたため、毎日午後になると高い発熱、下痢も加わって体力が急速に衰え、同年11月23日に24歳の短い生涯を閉じる。

文壇デビューしてから2年、結核の症状に悩みつつ死にもの狂いで努力し、ようやく掴んだ絶頂期から1年で終焉を迎えた、流星のような一葉の足跡は、台東区立一葉記念館の展示で見ることができる。

●石川啄木

今年、石川啄木（1886～1912年）没後100年に当たり、啄木の足跡をたどり、函館市、札幌市、小樽市、釧路市、東京都文京区など“ゆかりの地”で記念事業が企画開催された。

石川啄木は、明治三陸大津波の4年後（明治33（1900）年7月21日）に高田松原（陸前高田市）を訪れている。昭和33（1958）年7月21日に啄木の来訪を記念し、高田松原に歌碑が建立されたが、チ

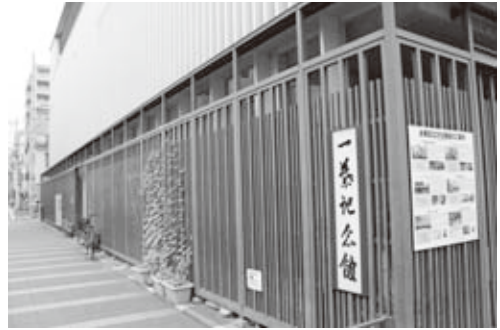


写真1 一葉記念館



写真2 石川啄木記念館

リ地震津波によりその歌碑が流失し、昭和41（1966）年7月21日に再度、歌碑が建立された。その歌碑も、東日本大震災により7万本の松とともに流失している。

啄木の歌で思い浮かぶのは、「たはむれに母を背負ひてそのあまり軽きに泣きて三歩あゆまず（一握の砂）」、「新しき明日の来るを信ずといふ自分の言葉に嘘はなけれど（悲しき玩具）」がある。岩手県の石川啄木記念館脇にある宝徳寺駐車場に「今日もまた胸に痛みあり。死ぬならば、ふるさとに行きて死なむと思ふ。」の歌碑がある。結核の化学療法がない時代、明治45（1912）年4月13日に26歳の若さで啄木は逝った。

啄木の生誕100年を記念して建設された石川啄木記念館には、啄木直筆の書簡や、生前啄木が愛用した品々等、貴重な資料が展示されている。

〔日本診療放射線技師会 諸澄邦彦〕